

原子力談話会 発行

原子力談話会 ニュース

1955. 2. 14



―― 内

容 ―――

学会会談原子力問題委員会	2
国会図書館の原子力文庫	3
伏見氏の英口入問題	4
常任委員会報告	13

原子力平和利用に関する2つの口際会談 (高永五郎) 6

原子力の社会的意義に関する国際科学者会談の提案 8

国際科学者会談に関するパーホップの手紙 10

伏見さんからの通信 (II) 14

！ 勘 き (余奇, 素察) 4

etc...

No. 8

学術会談 原子力問題委員会

1月24日午前10時半から午後4時すぎまで上野学術会談で開かれ、小樽委員長代理司会で、茅会長も出席した。主な議題は、米国の原子炉学校への留学生の件であつた。10日の往來委のときは、茅会長が出席して非公式に相談をもちかけたわけであるが、条件がはなはだ不明なので審議するに至らなかつたのである（既報）。それが24日には、もう事後報告を聞かされる事態になつた。別項のような茅会長の説明に対し、委員会の委員の多数は、「まだ期日が迫っているというだけで、はかばかしくところにもはからず人並にすることは、やはり納得できない。委員会に藤岡、佐見の調査団の帰るのをまつて留学生の件を本格的に討議する」という要約である。

★ アルソフへの留学生派遣決定 ———

24日の原子力問題委の席上、茅会長はこれに際して説明したが、大要は次のとおり。

1月10日午後の外務省での会合ではじめてやや条件がはつきりし、(1) 申込1月15日まで、(2) 工学または科学の修士で英語が堪能で、(3) 21才から35才まで、とわかつた。〔また費用はこちらもち〕。

そこで15日を目途に控え、正式の手続きはとれないので、利用準備調査会幹事会で、まず派遣を決定し、さらに翌日各委員がそれぞれ候補をもちよつて話し合いに決定した。1人は茅氏の推す東大工助教授大山彰、他は工技院調査課員伊藤義徳氏である。茅氏が大山氏を推したのは、学術会談会長としてではなく、調査会委員の1人としてやつたことだそうである。まず、茅氏は原子核と工学とから1名ずつ出したものと考へ、非公式に靖地正士原子核特別審判委員長（朝永委員長はまだインドにいる）にヒアリングところ、核物理学者は今の政府のやり方に大きな危惧を示していて協力するわけにゆがぬという線を出しているから、今回は見送るべきだろうと答へ、茅氏もそうするといつた。そこで工学の方は、英語ができることが条件なので、フルライトの英語の試験にとおつたがまだ行けなかつた人向を探したところ、たまたま東大工学部教授大山松次郎氏長男があつたので、原子力をやる気があるかと面接にきいたら、やろうということ、それならと推薦した。

また、この人並にあつては、ビザの出さうにもないものははじめから考へに入れなかつたと茅氏は発言して問題になつた。

アメリカからビザをもらふという事は、いさや一つの特権であつて、

よほどの人でないともう之ない時に、原子力研究の学取に將來つける可能性のある人物をそういう条件で之らぶことは不当である。学会会談の三原則中の、能力以外で差別しないということに反するという主張である。

これに対し、茅氏は、これは日本でどうなることでなく、boundaryの向題であつて、三原則に反するとは少しも思わぬと答えた。

また、期日だけに追われてはかるべきところへもはからず出したのはよくないという批判に対しては、逆に「あまり慎重になつて人を送らず、なぜ送らなかつたのかというひなんのあるのをあやれて、第何人の責任において行動した、といつのである。

★ オークリッパへの出学生。

オークリッパで毎日知られるアイソトープの講習への出学生の道出については、アルゴン又何と何は重大で何いとの判断で STACで入選されることになり、科研の平田稔氏、東教大の北田長生氏がきまつた。

これには学会会談は関係していない。

国会図書館の原子力文献

昭和28年度から購入して来た原子力資料は久しく倉庫内の部屋に並んでいて公開されなかつたが、最近になって急に準備が整ひ、昨年12月、本館中央の一室で公開されることになった。

一方、昨年夏知通産相からもらつて来たアメリカの原子力文献は、1トンあまりのものであるが、3月上旬横濱に到着する。この受け入れについて、かねて国会図書館と工務院とがあらそつていたが、けつきよく国会図書館にきまつた。24日の原子力問題等の席上茅氏は、整理費を例の原子力予算からの取り出すためには国会図書館では筋がとおらないので形式をかなりややこしくする老之があるという説明をしたこともあつたが、けつきよく、あの予算にはよらずに、国会図書館の経費で行うことになった。(まず通算300ドル、整理は約200万円たらずで来年度予算で行うはず)

また、今後毎月約2000冊づつアメリカから寄贈されてくることになる。



伏見康治氏 イギリスに入国できず

1月8日の産経新聞にまず、内容の理解しにくい報道があらわれ、又大塚君あての伏見氏のハサギ(伏見さんの通信 第2信)でも簡単にふれてあつて、大いに慶慶されていた伏見氏の訪英不能の問題は、1月21日産経新聞の共同通信の報ずるところでは、イギリス外務省は『イギリスが伏見博士の入国を拒否した事実はなく、伏見氏は入国査証の申請をしなかつた』といつた。しかも、イギリスの外務省消息筋は「伏見博士は沖三善の勧告によつて申請を取り下げた形跡がある」といい、姜田代理大使も「伏見氏の意をたてよう」とのべた。共同通信は日本の外務省や通産省にしほしほ足をはこんで説明を求めたのであるが、何の説明もなく、しかもある保留の如きは、絶対新聞にのせないなら詰合つてもよい、といつちという。

この疑義にみちた動きにつき、茅会長は24日の原子力問題研究会の席上つぎのように説明した。イギリスのどきば、調査団の出発に間に合はず、フランスでもらう予定にしていた。ところが、出発前、イギリス当局から伏見氏を除いて許可するお返事があり、茅氏は、伏見氏がアメリカへ行かないのをイギリスが發解しているのではないかと、在日英大使館のある人物に会見しようとしたところ、イギリスは「伏見氏は民主主義科学者協会のカンパニーであり、イギリスは今までの理由で入国を拒否したことはなかつたが、原子力には親密をともなうので許可できない」といつのである。茅氏もどうにもならないと判断して、外務省は伏見氏に電報で伝えし、あとから出發した佐々木氏にも伝えさせた。こうして形式的には伏見氏はビザの申請をしなかつたのである。

ところでこういう事情を、外務省の役人は、「伏見さんにキズがつく」といつて発表しなかつたといふ。セシ2のちがいがもしれないが、おそるべきことといわねばなるまい。

— 都 京 —

京都

—— 第4回 原子力問題研究会 開かる ——

—— 広重 徹氏の手紙から ——

1月21日 第4回の原子力問題研究会が開かれました。場所は湯川記念館。校物理、政治(赤芝、岡倉) 他廣の人から昨身一年の報告がありました。

物理は 予算と核研、

政府の前芝氏は J. S. C. の動きと関連の決試、

岡倉氏は "Hoboe Bpema" にのつたソビエトの外交評論家の「西独における原子兵器の發展」という論文の紹介……

アデナウアーはイーテンに手紙を送って、西ドイツでも非軍事的なパイルを作ることにしたと述べたが、軍需工業専門家やナチスの旧将重臣は公然と原子兵器生産を始めべきことを主張しており、アメリカとも諒解をつけて、誰とが（たれ）はアメリカの原子兵器工場を見学した。折々 Heisenberg が「ドイツにおける原子力」という最近の論文でドイツが原子爆弾製造能力をもつていたと述べているのが注目される。また大企業が僅つて「物理学研究協会」というものを作り、そこで原子力計画を進めている。ウラニウム同位元素の研究製造も進んでいる。-----

以上について、坂田昌一氏が Heisenberg は筆成しなくはないが、彼の nationalism の思想傾向と現在の西独の傾向とはよくマッチするといつていたことが氣をきされているようだ。西独の科学者がその中でどうしているか、アメリカの資本との結びつきはどうかなどが討論されました。

地核からは、地核調査の報告がありました。

地核調査所では予算で採入のカウンターを買って、山へ行って計つて来たが、一俵何を買つた事になつてゐるのが現状わからない状態である。その後、研究会として、どのように調査が行われたかを調査に行つたが、あれでは資源調査の体をしていないことが判明した。地元の人の話し合いで、もつと意見を交換をすることが大切であることが痛感された。----- 以上

次は、原子力のもたらし得るものについて総合的な討論をやつたらどうかという提案があり運営委員会で考慮することになりました。

東京 —— 分析会 ——

去月の暮までかかつて、有志でアメリカの原子力政策の分析をやつて来ましたが、いつの由にも分析会という名前がついてしまいました。自由に評論が出来て中々楽しいので、今度も是非続けたいと思つています。1月には旅会しましたが、2月2日に東京で開きました。高永君が「自然に書くことになつた原稿の内容に何を書くかということに関連して、今更し解われぬれが何をやるべきかを討論しました。最後に浅見君から原子炉設計の研究班の動きについて報告がありました。メンバーは日によつて変なのですが、不思議といつてもワケで、高永君と神保君が新聞の切抜きを持って来て読んだり、雰囲気は非常に愉快です。

(服部)

原子力平和利用に関する国際会議²

高永五郎

昨年12月4日、国連総会で原子力の平和利用に関する決議案が全会一致で採択されました。この決議には2つの内容が含まれております。すなわち一つは、原子力の平和利用を促進するための国際機関をもうけること。他は明年（1955年8月）までに適当な場所で原子力平和利用に関する国際会議を開くことであります。

前者の国際機関については、国連とは全く別個の、独立した権限をもつた機関とするという案がアメリカ側から出されていましたが、ソビエトは原子力の平和利用が軍事利用と全く無関係にあり得ないから、この機関は何らかの国連総会、あるいは安全保証理事会に対して責任を持つものにすべきことを主張し、結局この案に関する決定は将来にゆだねられることになりました。

また、オーストリアの国際科学者会議についても参加資格の案で米ソの間に争いがございました。すなわち、米側は「国連及びその外部機関（たとえば UNESCO とか WHO のような）に加盟している国」に限定することを主張したのに対し、ソビエトは「参加したいすべての国」にひろげるように提案しました。これには面白い話があります。この決議の原案は「原子力平和利用に関するワット（米・英・仏・カナダ・南阿・豪・ベルギー）共同提案」として11月の初めに国連当局に提出されたのですが、事務局に送付して直後、中口がわかって1955年万国郵便同盟執行委員会に代表を出席させたことがあるので、米口代表部は原案のままでは中口も国際科学者会議に参加の資格があるのではないかと疑義を生じ「決議案の一部に手落ちがあるので撤回する」といつて一度提出した草案をとりもどして研究しました。共同決議案なのに、米口代表部が単独でとりもどすのも変な話ですが、研究の結果2週間後に、そんなことはないすなわち「中口は万国郵便同盟の一員でないことがはっきりした」といつて再び国連事務局に提出しなおした、ということをして11月7日の朝日や毎日が伝えております。

この様な笑之ぬエピソードをききながらも、とにかく国連を舞台にして原子力の平和利用に関する大口間の話し合いの努力が行なはれ、全会一致で可決されるというように国際協力力の道が開けつつあることは明らかなことです。

しかし私は、現在国際協力の問題では決して手ばなしで樂觀することはできないし、油断することはきわめて危険だと考えております。その理由はたくさんありますが、この会議は原子力平和利用の技術問題にかさるのだとく

り返し強調されたり（そのため技術会評と略称されるようになりました）最近聞かれたこの準備会ではついに議長に対し不適當な発言に対しては「弁士中止！」の権限が与えられることになるなど、何かすつきりしない空気を感ぜさせます。またわれわれとしてはアメリカの動向を最も気にするのは当然ですが、初めアイクの提案した原子力平和利用の口際機関、この内容は原子力平和利用に関する米ソ交換文書のうち、3月19日付ダレス→ガービン宛書にくれしくでております。この米ソ交換文書はこの他にも大切なことがたくさんありわれわれの必読文献で、アウストラクトが「世界週報」1954年11月1日号に、全文の翻訳が「新時代」1、2月号に分載されています——は8月30日大統領の署名を得た改正原子力法によると、はじめの性格と非常に違ったものとなつております。すばわち原子力の分野でアメリカと関係を結ぼうとする双務協定という非常によい面がつく（「原子力」1月号の田中植次郎の論文、「国民の科学」3月号の拙著参照）ということだけはつきりしてきました。

このように原子力の平和利用における口際協力といつても、決して将来は担々たる道ではありません。一言でいえば、現在ではまだ真の口際協力の基盤は存在しない、ということであつて、われわれは人類の将来のためにこの条件の獲得、基盤の実現に努力をおしなくてはなりません。そのとき、少なくとも云えることは、日本において、現在の政府の原子力計画に参加することは全くこの方向の反対の途であり、わが口政府の原子力に関する既定の方針が進めば進むほど真の口際協力の実現はははまれるということでもあります。

では、真の口際協力にとつて何がガンか？ それは云うまでもなく、原子兵器が第三次大戦の決定兵器であるからであります。（この点についての詳しいことは「国民の科学」3月号を見て下さい）この判断が決して話だけの独断でないことは、世界科学者連盟の提唱する「原子力の社会的意義に関する口際連合の諸決議」と口際技術会評が明るい希望を示しながらもともすると暗い岩向に引きこまれようとするのを支えて、二つの口際会評が車の面輪となつてこそ初めて正しい原子力平和利用の大道を進むことが出来るのだと思います。こう考えると、口連の動向は勿論ですが、世界科学者連盟の提案のゆくえはきわめて重大なものをもつていてと思い、われわれはこの会評を大きな関心をもつて見守らねばなりません。さらにこの会評には真にわれわれの意見と気持ち代表する人を送り、世界の人心に向つてわれわれの悩みを訴え、協力を要請したいと思ひます。こういう努力が、原子力の平和利用を本当の意味で可能にする重要な一歩一歩の歩みになると信じております（2月10日）。

原子力の社会的意義に関する国際科学者会議の提案

核物理学を、大量破壊兵器に応用することの結果について、すべてのひとびとのあいだに増大しつつある憂慮と、おなじ科学的発見を、平和的建設の目的に応用することによつてえられる、莫大な利益との、いちじるしい対照によつて、私どもは、多くの国々への科学者が、この事態を討議して、可能な行動の方向をけんとうするための国際科学者会議をむろく必要を感じるにいたりました。

1954年5月、インド科学者協会は、古界科学者連盟にたいして、国際連盟によがけて、このような会議を組織するように、要請することを提案しました。1954年9月、ウィーンで開かれた、古界科学のオーストリア国執行委員会は、この問題を討議しました。

9月末に、口連の米口代表は、口連の援助によつて、原子力の平和的利用について、けんとうするための、国際科学者会議を召集することを提案しました。しかし、米口代表によつて、提案された会議は、古界科学連の執行委員会が9月の会合で討議したとき、考えていたような種類のものではありませんでした。そのあげいは、次のような点にあります。

1. 口連での提案によれば、参加科学者は、各口政府によつて指名されるもので、したがつて、政府の公式代表の役割をとんずるようになりがちである。
2. 会議への参加要請は、全世界にわたるものでなく、とくに、中華人民共和口の科学者は招請されないことになつてゐる。
3. 議題は、原子力の平和的利用についての、技術的問題だけに、かぎられてゐる。

したがつて、1954年11月5日、古界科学者連盟会長は、口連総会議長および口連事務総長あてに書かんを送り、口連で提案された会議の構想を、つぎのように拡大することが望ましいと、強調いたしました。

1. 議題を拡大し、原子力の平和的利用に加えて、つぎの問題をふくませる。

- イ、原子兵器、機械兵器、生物学兵器の危険
- ロ、原子力の管理の問題の科学的、技術的部面
- ハ、原子力等々の医学的部面

2. 会議への招待者の範囲を拡大し、原子力および科学一般の社会的意義を活発に討論し、また科学者組織の代表をふくませる。

この書簡に対する回答は、又今口連総会議長から到着しました。それによれば、その書簡の字しが各口代表に回付されてゐるやうです。

組紐上の觀察からは、口連の後援の下に用られる会談には、明らかに多くの便宜があります。しかし、口連総会の諸代表が会談を拡大して、上述の諸問題をふくませることに賛同しないなら、かかる会談を緊急に召集する必要が依然としてあります。

したがって、ジョリオ・キュリー教授は、古界科連オーストラリア執行委員会での討議の精神とつとて、もし、口連がその会談の構想を拡大することに賛同しないなら、古界科連およびその加盟団体のなかの各種の著名な科学者が上述の主題を討議するための、口連会談を組織する委員会の中核を構成すべきことを提唱しました。

すでに、つぎのうたと、右の組紐委員会への参加を同意しました。

1. F・ジョリオ・キュリー教授（フランス）
2. D・V・スコベルツイン教授（ソ同盟）
3. C・F・パウエル教授（イギリス）
4. L・インフェルト教授（ポーランド）

古界科連の加盟団体以外にも、他の多くの団体が、右の組紐委員会に参加する代表の名をあげるのが、望ましいことを指摘しなければなりません。実際、会談の成功は、いろいろな科学者組織に属する科学者、および組織に属さない科学者の、できるだけ広汎な支持および参加を獲得するのにかかっています。どこかが、それを容認しなければならぬ以上、古界科連がその最初の行動を起すことが適当であります。これはなんら、古界科連がこの会談を支配しようとする意図や希望を意味するものではありません。

なお、この会談がいかなる意味においても、口連が提案された会談に対抗するもので、という印象をあたえることは、もつとも望ましくないことは明らかであります。それどころか、もし二つの会談を開く必要があれば、口連の会談に参加する科学者の多くは、より広汎な会談の方にも、参加することが望ましいのであります。このためには、ここに提案する会談を口連の会談の直後に、その会談の場所からあまりはなれない所で開くことが望ましいのであります。

もしつぎにのべる措置をとることが出来れば、この会談を組織する計画に、大いに寄与するであらう。

1. 古界科連のすべての加盟団体が、その会談に、この会談の目的と構想とについて、討議をおこなうために、この提議をしらせること。
2. 各加盟団体は、それぞれの自国の口連総会首席代表に手紙を送り、口連提議の会談を、ジョリオ・キュリー教授の口連総会議長宛の手紙の提議の線

(10)

にぞつて、むろげるように要請すること。

3. 各加盟団体はこの会評を組織することを援助するために、招待さるべき自口の団体の名をあげること。

4. 各加盟団体は、この会評の發起人として、招かれるべき、もつとも著名な科学者の名をあげること。

もし、各団体、および個人がここに提議する会評の成功を確保し、これをもつとも広汎な科学者の真の代表者会評であらしめるために、とりうるいろいろな方法について、なんらかの示唆をお送り下さるなら、甚だ有益であります。かかる示唆についての通信は、すべて下記にお送り下さい。

The President of the world federation of scientific workers,
Prof. F. Joliot-Curie, Collège de France,
Place Marcellin Berthelot, Paris V

1954年11月22日

古界科学者連盟書記長

J. G. クラウガー

国際科学者会評についての ベーホッフの手紙

親愛なる同僚諸君

私は古界科学者連盟を代表して、みなさんにごあいさつ申し上げ、あらゆる国ぐにの科学者の心をよく動かしている多くの問題について、みなさんのご意見をうかがうよう依頼されました。

戦争が終つてこのかた、あらゆる国ぐにの国民は不慮と打ちひしがれた気持ちをつのらせながら、原子および熱核兵器が発達するありさまをみつめてきました。さいきん行われた実験と、それがもたらした悲劇的な結果とは、あらゆる方面に一群の強力な舌論をまきおこしました。みなさんはきつと、多くの国ぐにのいく人かの同僚たちが、このことに関して発表した声明書を、ご存知のことと思います。

私どもはこうした情況の中で、科学者は特別の任務をうけもつてしていると信じます。なぜなら、科学者はその仕事の本性からいつて、大量破壊兵器の発達の結果全人類が直面している甚大な危険をみつめることができるばかりでなく、原子エネルギーを平和的に应用することが出来るからです。

科学者は、これら二つの側面についての焼願すべき知恵をあたえる上で最良の立場にいるわけですが、このような報告があれば、原子エネルギーの平和的かつ人類福祉のための応用についてはこれほどまでに重きがおかれるべきではないということが、もつともつと強力に要求されるように、舌論をみ

ちづくことが出来るでしょう。

戦時よりもより平時の試験においてすらも新兵器がもたらす危険については、これまでも多くの国ぐにで、しばしば声明書が発表されました。しかしこれらの警告は、主として、何人何人の科学者が発したもののか、あるいは、特定の「シッテル」をはることができる科学者グループが発したものであり、そしてそのため、古論のあちこちの部分に、おそらくこうした警告をも、半信半疑でうけいれていたでしょう。

人類が直面している危険のほどは、おそろしいまでに現実的であると考えられますから、私どもは、この事柄にかんして客観的な声明書を発表することが、欠くべからざることだと信じます。それは、ひじょうに広汎な公衆に向けられた声明で、きめめて署名でかつひじょうに幅広い範囲の私学者の署名がなされていて、古論のいかなる部分といえどもその警告の誠実さを疑いえずに、おどろきの叫びをあげることができるような声明書であります。

かような声明書の本文をひとのえるためには、~~かような声明書の本文をひとのえるためには~~種々の国ぐにでの注意深い研究が必要とされるでしょう。そして私どもは、これらの予備的な研究の結果を討議し、かつ声明書の諸条件を起草するために、国際的な科学集会の開催を提案したいと思ひます。

国際連合が国際科学会評の召集を決定したことは、みなさんも、もちろんお気付きのことと思ひます。しかし、この会評は、原子エネルギーの平和的を用ということに限定された日程が組まれるでしょうし、また政府委員——つまり、特定の指令を与えられてゐる委員——のみによつて構成されることになるでしょう。1954年12月4日に国連総会で採択された決議は、つぎのようにのべています。すなわち、国連総会は、

「国際的協同を通じて、原子エネルギーの平和的利用を奨励させる諸手段を探索するために、そして、とくに、原子動力の開発を研究し、国際的協同がもつとも有効に達成されるような他の技術的諸分野——生物学的、医学、放射線防護および基礎科学のような分野——を考察するために、国際連合の主権のもとに、諸国政府の国際技術会評を開催すべきことを決定する。」

私どもはすでに、評事日程と科学者着代表の資格という二重の制約に対して、国連総会評長の注意をうながしました。

私どもが、他にわう一つの会評を組織することが有意義だと考へるのは以上のような理由によります。その会評は、たとえばスイスとかまたはデンマークで開くことが出来るでしょう。この会評はさきに言及した文書の草案

(12)

をつくることと、それを出版することとを主な目的とすることになるでしょう。

しかし、この会評は他の諸問題をも取扱うべきだということもまた根本的なことと考へられます。いろいろな危険についてはつきりさせたのちに、会評は科学と技術の最近の発展によつて人類が獲得し得る莫大の利益を考へることとするべきです。

このような会評を組織する第一歩は、国際的な委員会を設立することになければなりません。この委員会は、科学上のかじように著名な人物——どの1国からか1人または2人を越えない——から成り立ちますが、それは代表される諸見解の中が、私どもが組織しようと望む会評の肉な性格をよく反映するように構成されなければなりません。

世界科学者連盟はこのような会評の組織にさいしては、自分ごりの役割を勤めたいと急願しています。しかし、どのようにであれ、会評の方針を決定したり、あるいは会評の遂行にあたつて指導的な役割を果たそうなど望むものではありません。現在のところ、つぎのような著名な科学者たちの賛同による新たな委員会を保證することができます。——F・ジョリオ・キュリー(フランス)、C・F・パウエル(イギリス)、D・V・スコベルツイン(ソヴェト)、L・インフェルト(ポーランド)、S・S・ソケイ将軍(インド)。

私どもは、この会評の計画に対してみなさんが支持をあたえられることそして、もつとも広汎な分野のみなさんの同僚たちのあいだにこの会評の提議を知らせるといつたことで、ほんらかの助言をあたえられることを、深く感謝するでしょう。私どもはまた、会評の競争日程についての何らごの平峻や、組織委員会の仕事をお願いできる著名な科学者の名前についてのなんらかの平峻をあたえていただければ、幸と思ひます。

みなさんがこのようにして私どもを支持して下さることを、心から希望いたします。

暫定的な競争日程草案を同封します。それについての論評をいただければ幸甚です。

敬 具

1955年1月4日

E・H・S・バーホッフ

☆ 競争日程 草案

A. 原子および熱核兵器の

- | | | |
|----------------|-------------------|------------------|
| 1. 建造物 | 2. 生物組織 | 3. 長期にわたる発生学的変異の |
| 可能性 | 4. 遊蕩食物および地上作物の汚染 | 5. 大気汚染 |
| 6. 気象条件 に対する影響 | | |

(熱核兵器の危険について最も注意深く論議された資料を起草すること、

特別の配慮がはられるべきである。)

B. 原子核兵器にたいして、なんらかの効果的市民防護が可能であるか?

C. 原子核兵器の禁止および禁止の管理に関連した技術的諸問題

1. 水爆実験の検知
2. 原子原料を生産する諸施設の管理
3. 規則破りの生産あるいは貯蔵の検知

D. 原子エネルギーの平和的応用

1. エネルギーの生産
2. 医学、産業、研究等々における人工放射性元素の利用
3. 放射線の危険に対する勤労者の保護

以上

常任委員会報告

2月2日、新委員会最初の常任委員会を開き、次の事項を討議しました。

・新委員会の任務の分担

事務	服部、大塚
ニュース	大塚、服部、神保、
組 織	富永、長谷、
研究連絡	三雲、神保
会 計	服部、夏目

(会計監査は小川君に委託)

この他に規約や選挙法等の問題を審議する小委員会を作り、富永、西田、大塚君が中心になって検討する。

・前委員会よりの引継事項 (細かいものは省略)

- ★ 雑誌「原子力」を育てる。
 - ★ 研究活動強化する
 - ★ ニュースに委員の意見がどんどん出るようにする
 - ★ 分折会を続ける
- 等のことを方針として承認しました。

・アルバイトの件

事務の服部君が Over load なので、談話会の財政の許す範囲でパートタイムのアルバイトにニュースの発送等の雑用を手統つてもらうことを承認しました。

これについては、その後喜多尾君の紹介で 須田好枝子さんに、毎週1回

(以下16頁へつづく)

(14)

【オ3信】

あす (I-15) パリからブリュセルにとびます。昨日ジヨリオに会いました。湯浅史の通訳。日本の原子力に対する一般的報告を求めたのですが、雄弁で通訳が追いつかない感じ。“燃料費は、おもしろくなく、また実現も遠いと思うが、それも計算に入れる必要がある。濃縮燃料を手に入れて行く道と、独自の道と平行にやって行くべきだ。” “日本の事情に適した独自の考へが必要。” イギリスに行けない代りにもう一歩フランスにもどつて何かしたいと思っています。

【オ4信】

18日ブリュセルからアムステルダムに移りました。IKOとFOMの一部とを見ました。マスセパレーターは大したものだと思います。ベルギーの計画はBEPOそっくりで恐しく保守的ですが、オランダは大方進んだことを著しているようです。あさつてARNHEMでさらに話をききます。あすはPHILIPSの見学、ベルギーでスリゴジントCosynsのことをきいたら、ブリュセル大学を辞職したとのこと、原因はポリチカルではなくて人物がCrazy*

休見
からの通信
(II)

* だぶらだときりされました。スリゴジンは「力」に関係なく、物理屋はすつぽりされているといいました。

【オ5信】

25日フランクフルトからハンブルクで乗りつぎしてストックホルムにつきました。パリとザッテンゲンで新聞記者につかまりました。ドイツのザッテンゲンでアランク研でハイゼンベルクに会いましたが、もういいおじいさんで、そばにWinst というのがついて何もかも指摘しています。ライフに出ていたグラハイトの像りを見ました。密度2.06のものが得られるという話、しかし契約が結ばれなければならぬと上手に逃げる。フランクフルトでDEGUSSEAという化学会社で話をききました。アルゼンチンやスペインのU-アラントを作っているということです。ジルコンやベリリウムも手がけています。Li⁷を別けることもやっています。

【オ6信】

終着駅オスロ。今朝 (31日) ホテルでランタースに会いました。今日は忙しいので御挨拶だけ、それから彼なしでシエラーに行き (以下 13 頁へつづく)

雑誌“原子力” 55年 才3号 (通第4号) について

2月4日編集会議を開いて次のように掲載予定をきめた。

この号は ビギニー周年増大号 とする予定である。

- ★ 世界の原子力資源と独占資本 (更独誌より)
- ★ 世界科学者連盟の国際原子力科学者会議の提案 (高永五郎)
- ★ 米新原子法と学問の自由 (青木保三)
- ★ ビギニーの栄との斗い (名大, 北大, 小川岩男他)
- ★ 日本における放射性同位元素の工業的利用 (II) (武谷清昭)
- ★ 原子力発電所 (II) (森 一久)
- ★ 原子力見聞記 (伏見康治)
- ★ 読書案内, 雑誌紹介, ニュース, 書評, 企画欄,

日刊工業新聞社で今度“原子力工業”という雑誌が2月中旬発刊されるといふ。これは時流にのつて賣らんがための雑誌にしたいといっているそうであるが、われわれの雑誌“原子力”は、規定方針通りに正しい資料、意見をのせて、少しでも多くの読者に日本の原子力問題の本質を知ってもらうよう努力しなければならぬと考える。

今后も多くの人が、編集会議に参加して、或は手紙でも意見をのべてほしいと思います。

(12頁よりのつづき)

原子力見聞、第4番目になると余り感激なし、ただし、ここばかりは実感が自由無碍、ここで始めて日本からの手紙を受け取りました(山崎氏に至るところの大使館に手紙が待っているの、みんなのせんだい望の的)、原子力学校の人近新聞を見たが、こうして物理屋の手をはなれて行くことがよいのだろうか(ここでは英語だけですませる)。

31. I. 1955, Grand Hotel, Oslo.

〔才7信〕

霧のためオスローから飛行機が出ないので、汽車でコペンハーゲンまできました。他の連中も、しかし彼らはあすこゝから飛行機でロンドンに向い、僕はこゝに残され、いよいよ一人旅になります。ホーアの顔も見えます。——ランカースは相著者な男のようですが、ロンドビーにいれせると“一週間シェラーにいて後の一月は外口に行っている”原子外交官のようです。8月の口際会ぎのこと小塚さんに書きました。

Richmond Hotel 2, II, '55

(16)

【オ7 信】 — 服部君宛

今コペンハーゲンからパリに向って飛んでいる最中です。初めての一人旅でたいくつです。デーリー・テレグラフを見ると、藤岡一行は一月をくれたためスカリングヒルドを見事こなった様子。ストツワホルムで書いた情報では、イギリスの空気院で、「デーリー・スケッチ」という赤新聞は シェームレス・スチーラーという悪魔をつらっている。当方は責任感がうすれてきて、気が楽です。 (6. II. 1のち5)

之とせとら・エトセトラ・etc....

★... 深田の東京の分析会は 2月16日(水)の予定で「まだ出られない方も一度来て見て下さい。稿達のコロギウムを思い出します」と出席者たちはいふ。

★... お知らせ

クラストン・エドランド著 伏見他訳「原子炉の理論」は久しく出版を待ち続けていましたが、2月15日頃出版されることになりました。B5版で400頁に近いため、定価は 1600円 の高値になるといいます。読者の一人はこれをいたく驚かしておりますが、下取へ申込みは2割引でおわけできると申し出ていますので お知らせします。

申込先 東京都渋谷区幡ヶ谷本町2の350 石田望オ

大塚 道比古

(13頁よりのつうき)

手伝いにきていただくことになりました。今年高等学校を卒業する非常にハキハキした可愛いお嬢さんです。

●雑誌「自然」投稿の件

雑誌「自然」編集部より、来月号の「自然」に日本の原子力問題に対する考え方を談話会の誰かに書いてほしいという依頼がありましたので、討議した結果、富永君が代表して書くことになりました。

新会員:-

三輪 博秀

所 居

神戸工業 K.K.

身 向

紹 介

武 谷